赤ちゃんの四季（49）　平成25年春

すばらしい学習能力をもつ子どもの脳

これまで、子どもは、”ここ”と“いま”という限られた枠の中でしか物事を理解できず、原因と結果の概念や、現実と空想とを区別できないと考えられていましたが、じつは、赤ちゃんや幼児には意外な能力を持っていることが、最近の研究から次々と明らかになってきました。

赤ちゃんの素晴らしい学習能力は、周囲の様子を絶えず、じっと見つめているその観察眼にあるようです。眼から得られた情報は、赤ちゃんの脳コンピューターで「確率論的モデル」により統計解析を行い、自由な発想で行動に結びつけていると、カリフォルニア大学バークレー校の心理学者ゴプニック博士は指摘しています。赤ちゃんは、ふだん自分が目にしているものと異なる場面に遭遇すると、不思議そうな表情になりますし、幼児も、他人が変な行動をしているのは何か間違った行動をしているのではないかと解釈します。子どもが経験したことのない行動には、結構慎重であるのもうなずける思いがします。

進化的にみて、人間の最大の特徴のひとつは、私たちの幼年期が他のどんな動物種よりも長いことです。この間ずっと大人の保護の下にあり、周囲の環境について学習するだけでよく、ここで学んだことが成人してはじめて役立つ、脳の仕組みになっているのです。人間には、4〜5歳になってはじめて機能し始める前頭部前皮質と呼ばれる脳領域があり、集中、計画、効率的な作業といった高次機能を司っています。この前頭部前皮質の発達とともに、子どもがそれまで持っていた、創造的に探求し、柔軟に学ぶ能力が、より効果的に活用されていきます。

人間のみに与えられたこの幼児期の学習経験こそが、人類の叡智の礎です。私たち大人による幼児期の過度の教育的介入は、感性豊かな子どもたちの学習意欲を損なうものです。子どもたち自らが学習しようとするにふさわしい環境を提供し、じっと見守ることが大切なのです。